

境界 8

私たちが目に見えぬまま遺すもの。

遅れてやって来る一つの問いがある。

私たちが思うよりもずっと遅れて。

若い頃、私たちは人生に何を手に入れられるかを問う。

大人になると、何を保ち続けられるかを問う。

多くの年を経てはじめて、私たちは別のことを問いは始める。

私たちがもうここにいなくなったとき、何が残るのか。

それはめったに声に出して口にされない問いだ。

おそらく私たちが不安にさせるからだ。

おそらく現在の向こうを見ることを強いるからだ。

おそらく誰も、自らの不在と向き合うことを好まないからだ。

それでもやって来る。

つねに。

遅かれ早かれやって来る。

長いあいだ、私は遺産を目に見える何かだと思っていた。

一つの世界。

一つの家。

一つの本。

一冊の本。

一つの成果。

指し示され、認められうる何か。

やがて時間が、より深い一つの真実を私に示した。

私たちが遺す最も大切なものは、目に見えない。

それらは目録には現れない。

決算書には入らない。

統計には収まらない。

それでも生き続ける。

一冊の本も書かなかったのに、幾十もの人の人生を変えた人々に私は出会った。

大きな組織を率いたことは一度もないのに、家族まごごとに消えない刻印を残した人々に。

いかなる百科事典にも載らないのに、自らの行いの結果を通して存在し続ける人々に。

この発見は、私が成功を見る仕方を変えた。

なぜなら成功は見られることを好むからだ。

ところが本物の遺産は、しばしば陰で働く。

自分の親を思いみよう。

自分の教師を。

わずか数か月出会っただけで、何十年も私たちに影響を与えうる、ある人々を。

彼らの多くは、自分が私たちに及ぼした影響をまったく知らない。

彼らは語った。

行った。

生きた。

そして何かが残った。

今日もなお続く何か。

これこそ人類の歴史の目に見えない部分だ。

最も大きな。

最も語られない。

最も力強い。

年を重ねるにつれ、私は自らの選択を別の仕方で見えるようになった。

私はもうこう問うだけではなくなった。

「私は何を築いているのか」

こう自問した。

「私は何を受け継がせているのか」

違いはわずかだ。

だがすべてを変える。

築くことは現在に関わる。

受け継がせることは未来に関わる。

そして未来にはつねに、私たちが知りえない人々が
住んでいる。

子どもたち。

孫たち。

読者たち。

友人たち。

見知らぬ人たち。

いつの日か、私たちが後に遺した何かに触れること
になる人々。

彼らは私たちが何者だったかを知らないだろう。

すべての細部を知ることはないだろう。

だが一つの結果を受け取るだろう。

そしてその結果が、私たちに代わって語るだろう。

職業人生のあいだ、私は数々の計画が生まれ、消えていくのを見た。

会社が成長し、変わっていくのを。

市場が姿を変えるのを。

技術が時代遅れになるのを。

永続的に見えたすべてが、仮のものと明らかになった。

はじめ、この現実は私を不安にさせた。

やがて私はそれを解放的なものだと感じ始めた。

なぜならそれは、本当に持続するものを別のところに探すよう私に強いたからだ。

そして持続するものは、私たちが所有するものとはほとんど一致しない。

それは私たちが手渡すものと一致する。

一つの言葉。

一つの原則。

一つの手本。

一つの振る舞い。

一つの存在のかたち。

私たちが受け継がせるものは、それに付き添う私たちがもういなくなっても、旅を続ける。

他人の言葉や振る舞いのなかに、もういない人々の断片を見いだすことが、私にはよくあった。

一つの考え方。

一つの感受性。

一つの皮肉のかたち。

一つの教え。

そうした瞬間に、私は一つのことを理解した。

人は完全には消えない。

彼らの一部は、なお世界のなかを動き続ける。

思い出としてではなく。

影響として。

そしておそらく、これこそ最も本物の残存のかたちだ。

年を重ねると、私たちは次第に自らの遺産の見かけに関心を持たなくなる。

その質のほうに、より注意を向けるようになる。

それがどれほど大きいかは重要ではない。

それがどれほど真実かが重要だ。

誠実に受け継がれた小さな真実は、虚栄のために築かれた大きな建造物よりも長く生き延びうる。

歴史はそうした例に満ちている。

記念碑的な作品は崩れ去る。

原則は旅を続ける。

構造は変わる。

価値観は生き延びる。

だから今日、私はあらゆる関係を一つの種まきのかたちと考える。

何が本当に育つのか、私たちには決してわからない。

どの言葉が残るのか、決してわからない。

どの振る舞いが覚えられるのか。

どの手本が真似られるのか。

私たちにできるのは、ただ誠実に振る舞うことだけだ。

そして残りは時間に委ねることだ。

人生の終わりに、勝利の正確な数を覚えている者は少ないと私は思う。

細かな成果を覚えている者は少ない。

肩書きを覚えている者は少ない。

だが多くの者は、自分がどう扱われたかを覚えている。

どう迎えられたか。

どう敬われたか。

どう愛されたか。

これが目に見えない遺産だ。

写真には写らないもの。

拍手を生まないもの。

注目を求めないもの。

それでも最も長く持ちこたえる部分だ。

今日、振り返って、私は一つの人生が成し遂げたものだけで測られるのではないと理解する。

それは、他者のなかに生き続けるものによっても測られる。

私たちが受け継がせた思想のなかに。

私たちが助けた人々のなかに。

私たちが守った尊厳のなかに。

私たちが生み出した信頼のなかに。

私たちが呼び覚ました勇気のなかに。

すべて目に見えないもの。

すべて現実のもの。

おそらくすべての中で最も現実的なもの。

なぜなら、時間がほとんどすべてを奪い去ったとき、
目に見えないものが残るからだ。

私たちが目に見えぬまま遺したものが。